■ 分科会『高等学校関係者対象の分科会』

○司会：皆さん、こんにちは。お忙しい中、本日はお集まりいただきまして誠にありがとうございます。私、文部科学省の高等教育局大学振興課改革支援第一係長をしております荒木と申します。本日は、この会でＧＰ――「Good Practice」のご紹介、現状をさまざまな視点で皆さんと一緒に見ていく中で、高校生や高校関係者の方が進学にどういうふうに有効に活用していけるかということも含めて一緒に考えていければというふうに考えております。15 時までの 90 分を予定しております。これから３名の方に講演いただいた後、質疑応答を予定しておりますので、ご意見あるいはご要望でも結構ですので、積極的にいただければありがたいというふうに思っております。よろしくお願いします。

なお、この分科会の資料は、お手元のパンフレットの 39 ページからとなっておりますので、ご参照ください。

まず最初に「ステークホルダーとの確かな絆を結ぶために」というコンセプトで大学を支援する雑誌を出版されています、株式会社進研アド、『Between』の編集長の真境名（まじきな）妙子さんから、『大学教育改革の現状～ＧＰとは何か』という題名でＧＰの仕組みや全体像、いくつかの大学の取組の紹介をしていただきまして、今後の課題等についてご講演いただければというふうに思っております。それでは真境名さん、よろしくお願いします。

○真境名：こんにちは。進研アドの真境名と申します。私どもの会社はベネッセコーポレーションのグループ会社で、その中で私は大学改革をテーマにした『Between』という専門誌を作っております。今日は高校の先生方にぜひ伝えたいと日頃から思っていることを中心に、ＧＰについて紹介したいと考えております。

ＧＰは文部科学省が実施しています国公私立を通じた大学教育改革の支援の充実という事業の中の一部として位置づけられています。各大学が取り組む教育プロジェクトの中から国公私立大学を通じた競争原理に基づいて、優れたものを選定して重点的に支援し、高等教育の活性化を図ることを目的としたものです。世界的な研究拠点を作る 21 世紀ＣＯＥプログラムをはじめとして、さまざまなプログラムがございます。その中で特色ＧＰ・現代ＧＰの二つは、選定率の目安が２割程度という比較的厳しい審査を経ること、社会に対して積極的な情報発信が求められていることなどによって他とは区別され、「ＧＰ」という名称で呼ばれています。

さらに他のプログラムが、例えば専門職大学院のある大学でなければそもそも申請ができない、医学系の学部学科がなければ申請ができないなど、一定の制約がある中で、特色ＧＰは「特色ある優れた大学教育改革の取組、現代ＧＰは社会的要請の強い政策課題に対応した優れた取組」というように、非常にゆるやかなテーマ設定になっていますので、およそどの大学にとっても挑戦の機会が与えられています。さらに特色ＧＰは既に一定の実績がある取組を対象としているのに対し、現代ＧＰは、例えば地域活性化に貢献するようなもの、知的財産に関連する教育、総合的なキャリア教育などのテーマに沿って、これから行おうとしている教育の計画も対象にしていますので、よりチャレンジしやすい支援プログラムだといえます。

一番上にございますように「ＧＰ」という名称は「Good Practice」という言葉の略称で、近年国際機関の報告書などにおいて「優れた取組」という意味で幅広く使われている言葉だそうです。

ＧＰの仕組みについてご説明します。各大学がこれぞという教育プログラムで申請するわけですけれども、その際に学長のリーダーシップの下で大学全体のビジョンに合致するものを出してくるということになっています。従来の学部縦割りではなく、全学的な視点から議論をして選んで出してきてくださいということです。次に審査ですが、大学の教員をはじめとする高等教育の専門家が中心になりますが、皆さんのお仲間で

ある高校の先生方も加わっています。今年度の特色ＧＰは、選定率が14.5%、現代ＧＰは19.8%でした。

で、ＧＰに選定された大学はそのプログラムについて、ホームページなどで積極的、継続的に情報発信することが前提となっています。優れた取組を他の大学に参考にしてもらう、教育の特色を受験生をはじめとする大学ユーザーに紹介をするということも事業の目的の一つになっていますので、そもそも選ばれた大学がきちんと情報を発信しなければ意味がないというわけです。

ＧＰのねらいについて、文部科学省はこのように説明をしています。「国公私を通じた教育の質向上のための財政的なサポートと情報提供」。この１文の中の「国公私を通じた」という点、それから教育のための財政的なサポートという点。これらは実は、文部科学省のこれまでの政策を180度転換する重要な意味を持っています。まず「国公私を通じた」ということですけれども、これまで国は大学全体を支援するにあたって、国立大学に対しては直接運営費を交付する、公立大学に対しては総務省からの地方交付税で支援をする、私立大学に対しては私学助成でというように、それぞれ全く別々の枠組みの中で財政支援をしてきました。それによって、国、公、私の間に明確な垣根を設けていたわけです。その垣根を取り払って同じ土俵の上で競わせることによって、どの大学が頑張っているかということを国民から分かりやすく、見えやすくする狙いがあると言えます。

一方の教育のための財政的なサポートという点ですけれども、これまで国は大学の研究に対しては積極的にお金を出して育てようとしてきましたけれども、教育の内容に対して口を出すことは控えるという姿勢をとってきました。大学の自律を尊重するということであり、教育はその対価として学生から支払われる授業料を使って各大学がきちんとやってくださいということだったわけです。ところがそのような形だと、大学自身が研究ばかり一生懸命やって教育を本当に良くしようということがなかなか進まないため、しびれを切らした文部科学省がＧＰのような事業を始めたと言えます。

高等教育行政の変化をもう少し分かりやすくまとめると次のようになります。まず最初に、大学同士がお互いに情報を出し、それを参考にするという開かれた大学への体質改善を促すということです。次に、護送船団方式をやめて、本当に努力をしている大学に対して集中的に支援をしていこうということです。次に、教育の個性を磨かせる、さらにその教育の質を偏差値に代わる大学の新しい価値基準として提起しよう、そんな方向に文部科学省はシフトしていると考えられます。３番目と４番目に関しましては、高校現場にとって特に重要な意味を持ちますので、ＧＰの情報というのは高校現場に届かなければ殆んど意味がないと言ってもいいでしょう。

では、実態はどうでしょうか。その話に入ります前に、いくつか実際にＧＰに選ばれた大学の取組の事例をご紹介いたします。まず最初に、千歳科学技術大学。この大学は理系学生の数学と物理の基礎教育のシステムを高校の先生との連携によって作り上げたという点、それからｅラーニングときめ細かい対面授業とのセットによって大きな効果を上げたということが評価され、03年度の特色ＧＰに選ばれました。そもそもの問題意識は、学生の学力や学習意欲が多様化する中で理系の学生が専門的な教育に入っていくために、どうしても必要な基礎的な学力をどのように向上させたらいいかという点だったそうです。その解決の方向性として、学生にとっては興味を持って飽きずに繰り返し取り組めるシステム、教員にとっては学生の取組を時系列的に把握できるシステムを提供する、ということを考えました。これらを両立させるために、高大連携が大きな力を発揮しました。

この大学では、98年度の開学以来、地域の高校の先生とのコミュニケーションが非常に活発で、大学教育のベースとして高校ではどんな学習をさせたらいいかということを熱心に協議をしていたそうです。その成果の一つとして、数学と物理のｅラーニング・システムができあがりました。これを基礎教育で活用し、高校までに学んだ知識をきちんと体系化し、学生１人１人の中に定着をさせるということに力を入れました。この仕組みを具体的に示したのがこちらです。左側にありますｅラーニングの授業と右側の対面授業とを学生は行き来するわけですが、ｅラーニングのほうは100人を一つのクラスにまとめ、学生が主体的に勉強をします。担当教員は学生の質問に答えつつ、１人１人の学習履歴を把握します。

右側の対面型の授業は、高校の復習レベル、大学の講義の復習レベル、発展的なレベルという三つの段階で用意し、下の二つに関しては高校の先生が担当して

います。学生はｅラーニングで確認した自分の理解のレベルやテーマに対する興味、関心に応じて、三つの対面型授業のうち毎回好きなところに参加していいということになっています。このような学生の進捗や興味、関心に応じた勉強の仕方をサポートすることによって、従来実施していた基礎教育のシステムと比較をした時に、明らかにこちらのほうが学力が向上するということがデータで裏づけられたそうです。

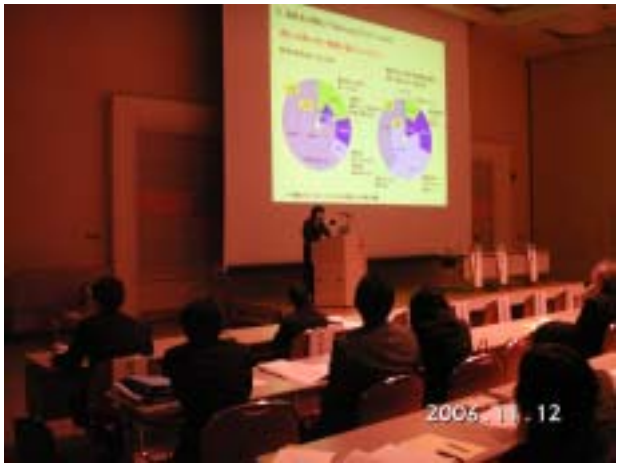
次に高岡短期大学。現在の富山大学高岡短期大学部の 04 年度の特色ＧＰ「学内を学生作品で埋め尽くそうプロジェクト」をご説明します。この短大には芸術系の学科があり、工芸品、実用品を中心に創作活動に取り組みます。その際に個人の感性を追求するあまり、実際にそれを使う生活者の視点に立ったものづくりができないという課題があったそうです。その解決のために大学を一つの模擬社会に見立て、実社会を意識した制作環境を提供するということを考えました。

具体的にはキャンパスの中で、例えばベンチですとかゴミ箱ですとか、どんな備品が必要か、環境調査で調べ、それぞれがアイデアを出します。きちんとしたコスト管理に基づく制作ができるように、ビジネス系の学科と連携をしまして、原価計算に関する授業も受けます。使い手の立場に立った設計をし、試作品を作ってコンペをして、選ばれた学生はその発注者となる大学の事務部と製品の仕様や価格についても自ら交渉をします。制作、引渡しをした後も、外部の専門家による第三者評価によって製品の機能、デザイン性に加え、制作のプロセス、効率性、コスト管理などについての評価を受けます。このようなプロセスを通して、社会に出てプロとしてものづくりに取り組む際に求められる制作技術はもちろん、社会のニーズの把握、プレゼンテーション能力、調整力、コスト感覚などが育まれていくということです。

最後にご紹介します札幌の北星学園大学短期大学部。この短大は英語教育の実績でまず特色ＧＰを受け、そのプログラムを発展させるという計画を出して今度は現代ＧＰに選ばれたという、いわばサクセス・ストーリーとも言える事例です。もともとの目標は、英語で自己表現ができる力を育成しよう、日本語と英語の両方で教養を修得させようということでした。実際に何をやったかと言いますと、一般教育科目の中の一部、歴史ですとか心理学、人類学などをネイティブ・スピーカーによる英語の授業で開講しました。その中から３科目を履修するように義務づけ、もちろん日本語の従来の一般教育科目の履修も何科目か義務づけます。これで 03 年度の特色ＧＰを受け、今度はその英語の授業をｅラーニングの教材として開発し、オンデマンド化する計画で 05 年度の現代ＧＰに選ばれました。学生が英語の授業にいつでもどこでもアクセスできるようにして、個別のニーズに対応できる環境を整えようとしています。

今日はたまたま北海道の事例が二つ入りましたが、あえて地方の大学、短大の例を紹介しました。中には先生方が名前を聞いたことがない学校が入っていたかもしれません。ＧＰというのはまさにこのように、全国的な知名度がない大学や短大であっても、何かきらりと光る取組をしていればそこに光を当てようという趣旨の事業だと言えます。

では、このようなユニークな教育の情報が高校生に届いているのか、ちょっと古いデータになりますが、『Between』編集部が一昨年の秋に高校生 300 人を対象に調査を実施いたしました。３年生と２年生に聞いておりますけれども、この時期３年生の多くは志望校を決めて関心の持ち方が違うと思われますので、ここでは２年生の結果にご注目いただきたいと思います。左側のグラフですけれども、２年生の実に８割近くが特色ＧＰのことを知らなかったと答えています。一方右側のグラフですが、「特色ＧＰに選ばれた大学や教育内容を詳しく知りたいと思うか」という問いに対して、「そうは思わない」と答えた生徒は、たった１％でした。残り 99％の中の１％は「既に十分知っている」と答えており、98％は「各選定校について知りたい」、または「自分にとって興味のある大学については知りたい」と答えています。



この結果から、高校生は結構ＧＰに対して関心を持っているのに情報は届いていないということが言えそうです。先生方の実感と比較して、いかがでしょうか。これは大学がＧＰについて伝える努力をしていないということではないかと考えられますが、実際には大学は「そんなことはない。我々はホームページなどを通じてきちんと情報を発信している」と言います。しかしながら、大学の情報発信のあり方と高校生が本当に必要としている情報との間にギャップがあるということは、先生方、よくご存じだと思います。

例えば多くの大学がＧＰについて、このような広報をしています。ホームページのトップで、「本学の○○の取組が今年度の特色ＧＰに選ばれました。詳しくはこちら」とあり、そこをクリックすると、文部科学省に出したＧＰの申請書のＰＤＦファイルがそのまま出てきてそれでおしまい、という方式です。申請書にはどういう内容が書かれているか、一例としてある大学のものをご紹介しますと、「ＦＤ等の能力開発は、……○○大学の理念と目標を共有し、……教育方法や教育課程の改善を目指す取組である」という具合です。

これは文部科学省のホームページから無作為に選んだもので、この大学が実際にこのような広報をしているということではないと申し添えておきます。いずれにしても申請書にはこのようなことが書かれていますので、高校生はもちろん一般の社会人であっても、そのままの説明をされても、その大学の取組を理解し、興味を持つということは難しいと思います。そのような広報をしている大学が、本当に自分の大学の特色を伝えようと考え、理解してほしいと考えているとは思えないわけです。中にはＧＰに選定されたことを全く広報しない大学もあると聞きます。

今日お集まりの先生方は、ＧＰに関して何らかの情報を求めていると思います。ですから、大学のこのような姿勢に対しては、それはおかしいんじゃないかとおっしゃっていいんじゃないでしょうか。ＧＰというのは、選定されたらその情報をちゃんと発信することになっているはずだ。それをせずに補助金をもらって終わりというのでは、ルール違反じゃないかとおっしゃってください。それから今日は、司会の荒木さんをはじめ文部科学省の方もいらっしゃるので、ちょっと言いにくいのですが、大学に対して自分たちが課している情報発信のルールを徹底させていない文部科学省にも問題があると思いますし、そもそも文部科学省は先ほど申し上げたような観点から肝いりの事業をしているわけですから、それを自らもっと上手に、今日のフォーラムもその一環ではあると思いますけれども、さまざまな工夫をしながらアピールをしていいのではないかと考えています。

学生募集が厳しくなる中で、大学は以前とは比較にならないほど高校現場の声に敏感になっています。ですから、高校の先生方にはぜひ積極的に声をあげて大学を動かし、ＧＰについての情報がもっと分かりやすい形で、もっと豊富に出てくるような流れを作っていただきたいと思います。そしてＧＰに限らず、大学が教育の個性を磨き、その情報を積極的に発信するような仕組みをもっともっとたくさん作ってほしいと注文を出してはいかがでしょうか。高校生の視点から大学の教育の特色が比べられるようなシステムができて、知名度や偏差値とは異なる新しい物差しが社会に定着すれば、高校生は自分の個性や適性、興味、関心に合わせてもっと多様な選択肢を持ち、今よりもより適切な進路選択が可能になると思います。高校の先生方には、ぜひ生徒さんのためにその前線に立っていただけたらと思います。

ご清聴、ありがとうございました。（拍手）

○司会：真境名さん、ありがとうございました。我々に対するご批判、それから大学に対する厳しいご意見、いろいろあるかと思いますけれども、それはまた後ほどお伺いしたいと思います。続いて教育改革の進んでいる大学として皆さんにも著名ではないでしょうか、金沢工業大学の企画調整部長の村井好博さんにお越しいただいております。村井さんから『ＧＰを通した大学改革の取組』ということで、具体的に金沢工業大学がこういう取組をやっているんだということについてご紹介をいただきながら、ＧＰをどういうふうに進路指導等に活用していったらいいのかというような可能性も踏まえてご講演いただければと思っております。

村井さん、よろしくお願いします。

○村井：金沢工業大学の村井でございます。よろしくお願いいたします。本日は『ＧＰを通した大学改革の取組』ということで、金沢工業大学の実践についてご紹介をさせていただきたいと考えております。まずはじめに「今、大学は」ということで、大学が置かれている環境、さらに今大学が求められている教育改革という内容についてご紹介をさせていただきたいと思います。

先生方ご存じのとおり、18歳人口が減少いたしまして、ついに大学全入時代が到来したと言われております。また偏差値も未だ大学選びの基準としてありますが、今日、大学ランキング等多様な外部評価というものがマスメディアでもって公開され、大学が序列化されてきております。さらに大学のほうは第三者認証評価機関による評価の義務化ということが学校教育法の中で制度化され、７年に１回、文部科学省が認証する第三者評価機関による評価というものを受けなければならなくなりました。このことによって各大学の特色であるとか改善点というものが明らかにされ、それが公開されていくということで、先生方にはこの第三者認証評価の結果というものをぜひご覧いただきたいなと思っています。

さらに昨今、入学者の定員割れという現状が、４年制大学におきましては全体の約４割、短期大学におきましては約６割が、定員割れが起こっております。そしてさらに現在、既に大学の倒産が始まったということで、まさに先ほど真境名様よりお話がありましたように大競争時代が始まったかなと思っております。そういう中において、大学はやはり個性化・特色化の推進、さらに教育力・研究力の強化、さらに社会ニーズへの対応、自己点検評価と改善ということで、大学の社会への説明責任ということが大きく求められ、さらにそのことに対して積極的な情報提供ということが求められております。先ほど真境名様よりお話がありましたように、大学の情報公開が不十分であるという話ももっともです。そういう意味では、大学そのものがいろんな意味で教育改革を推進していかなければならないと考えております。

次のスライドは、現在、文部科学省が支援する大学教育改革の全体像でございます。これは今日の資料集にも載っておりますが、文部科学省のホームページからひろってきた 18 年度のものです。大きくは大学のさまざまな機能に応じて、文部科学省が支援する仕組みです。このグランドデザインは、中央教育審議会で出されているものでして、「大学の機能」であるとか「大学の人材育成像」を明らかにした中での取組を推進しなさいということで、それに対するご支援をいただいております。さらに共通基盤としての特色の発揮ということに関しては、大学が共通にご支援いただいております。この支援の枠組みに特色ＧＰというプログラムがございます。

それでは次に、「ＧＰとは」というスライドですが、先ほどらいご紹介がありましたが、大学は「ＧＰを教育改革プログラムだ」というふうに捉えております。その中でも競争して選ばれるわけですが、国公私立大学を通じて競争的環境のもとで公募され、選定されていきます。さらに専門家等による第三者評価による公正な審査ということで、各大学は申請書を書き約２割弱が選ばれています。実際は、書面審査が通り、面接・ヒアリング審査が行われ、最終的に決定するというプロセスの中で、公正な審査という段取りが組まれております。さらに選定された場合は社会に積極的な情報提供をしなさいということで、各大学はいろんな機会や取組の中で、選定された教育プログラムを公開しております。

それでは今日のメインテーマであります、「特色ＧＰと現代ＧＰの違いは何か」ということでございますが、特色ＧＰとは「特色ある大学教育支援プログラム」という名称です。簡単に言いますと学位を与える課程に応じた教育内容・方法等の高度化、豊富化に資する特色ある優れた取組ということであり、これまでの実績が評価されています。それに比べまして現代ＧＰは「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」という名称で、各省庁の政策に基づいた社会的要請の強い政策課題に対応した人材育成テーマの設定の下で、各大学、短大、高専がそれぞれ申請し、その中で優れた教育プロジェクトというものを選定していこうという教育改革プログラムでございます。

それでは次に、18 年度の募集内容ですが、大きくは二つに区分されており、一つは学士課程・短期大学士課程における教育課程における取組として、「教育課程の工夫・改善」、さらに「教育方法の工夫・改善」、「それ以外の教育の工夫・改善」という三つのテーマから一つだけ選んでエントリーができます。もう一つは大学院の修士課程であり、「人社系の教育」、「理工農系の教育」、「医療系の教育」の中から、一つだけ選んでエントリーができるようになっております。

現代ＧＰのほうは、社会性の強い政策課題ということをテーマにしておりますので、18 年度の公募テーマとしては「地域活性化への貢献ということで地元型と広域型」、さらに「知的財産教育関連」、「持続可能な社会につながる環境教育」、「実践的な総合キャリア教育」、さらに「ニーズに基づく人材育成を目指したｅラーニング・プログラムの開発」という中で募集されており

ます。

それでは次にどういう大学が選定されていくのかということで、若干スライドのほうでご説明をさせていただきます。特色ＧＰは、現在実施している取組が評価され、現代ＧＰは計画をしている取組が評価されていくというふうにご理解をしていただければ分かりやすいかなと思います。その中で、スライドは、Ａ大学、Ｂ大学、Ｃ大学と三つから申請された場合、Ｂ大学が選定されたというふうに書いております。それではＢ大学の特徴は何なのかということになりますが、実際には基盤となる教育研究の実践がしっかり行われているということです。

中身としては教育の理念･目標が明確にされており、教職員の全学的・組織的な実施体制の下で、その教育実践における自己点検評価というものが確実に実行されており、一般に言う計画-実施-評価-改善というＰＤＣＡサイクルが回っているということです。場合によっては、その取組が第三者による評価も受けているということでありますし、その取組そのものが社会ニーズを満たした教育研究の実践であるというものがやはり数多く選定されておりますので、ぜひ今日のフォーラムで各大学が選定されている取組を見ていただいて、参考にしていただきたいなというふうに思っております。

それでは次のスライドで、どういう大学が選定されているのかということで、若干、手前味噌なところもありますが、特色ＧＰと現代ＧＰの選定された数を足し算してみました。これは各大学が単独で取組んでいる申請のみの集計でございますので、チームで出された大学は外してあります。金沢工業大学の場合は特色ＧＰを２件、現代ＧＰを４件いただいておりまして、合計６件でございます。この順番は大学名の五十音順で並べました結果、あいうえお順で「か」が最初にきましたので一番最初になってしまいましたが。こういうふうに見ていただきますと、黒色が私立大学でございます。青色が国立大学でございます。やはり私立大学が、若干特徴があるかなというふうに思いますし、今日お越しの先生方には、いろんなランキングの中で大学の状況が公表されておりますが、多分この種の大学の名前が挙がっているかと思います。そういう意味で、ここに名前が挙がっている大学は、やはり教育改革に熱心であるというふうにご理解をしていただければ、大変ありがたいなと思っております。

それでは、これから金沢工業大学の紹介をさせていただきたいと思います。金沢工業大学は建学理念として「人間形成・技術革新・産学協同」の三つを掲げています。ビジョンとしては、教育・研究・サービス、この三つにそれぞれ卓越性というものを求めております。金沢工業大学は教育付加価値日本一の大学という教育ビジョンを掲げています。この「教育付加価値日本一」というのは、入ってきた時の学力と人間力が卒業時には高くなっているということで、その付加価値の高さによって大学を評価してもらいたいということでございます。そういう教育ビジョンのもと教育目標を「行動する技術者」の育成というふうに定めて教育に取り組んでおります。

現在、３学部体制で大学を運営しております。一つは工学部、一つが環境建築学部、一つが情報フロンティア学部でございます。工学部は「ものの創造」、環境建築学部は「環境の創造」、情報フロンティア学部は「知の創造」ということで、それぞれ行動する技術者の育成ということを目標にした取組を実践しております。その他、大学院には工学研究科９専攻、心理科学研究科１専攻がございます。特徴的な仕組みとして、教育支援機構という授業を支援し、学生の課外学習を含めた学習支援をするセンターがそろっております。また研究支援機構は、学生の研究と先生方の研究を支援する仕組みとして25個の研究所を現在持っております。

それでは、金沢工業大学の教育改革はどういう考え方で行っているのかということをご紹介させていただきたいと思います。まず初めに、「学生を主役にした教育実践」と書かせていただきました。学生を主役にした教育というのはどういうことかと申しますと、「１人１人の学生の活動に注目をする。注目をしながら、その学生を積極的に支援していこう」という考え方でございます。そういう意味では、学生１人１人の個性や能力というものを見極め、それを支援していくという考え方に立っております。

二つ目が、従来大学教育というのは先生方の個々の教育で伝統的な教育だったかなと思っておりますが、今日多様な学生たちを受け入れる段階になりますと組織的な教育への転換を図っていきたいということで、「組織的な教育」というものを目指しております。

三つ目が、「修学満足度の向上」と「夢考房キャンパス」の形成をというふうにまとめさせていただきました。修学満足度の向上というのは、学生が入学して卒

業していく間にどういう付加価値をつけていくのかということと共に、そのことが自分として満足できるのかどうかということをとても大事に考えています。もう一つは、大学というのはやはり一つの擬似社会を形成していると考えておりまして、そういう意味では夢考房キャンパスというのは、学生が生き生きといろんな活動にチャレンジしてほしいと考えております。そういう意味では、「チャンレンジする学生に積極的に支援をする大学だ」というふうにご理解をお願いしたいと思います。そして、学生の意欲と自主性を引き出すということに注力をしております。実際には、授業というものと課外学習を通じて学生の学習スタイルの確立を図り、さらに教育の質の向上を図ってまいりたいと考えています。

現在、合言葉として、「年間 300 日の学習支援」という言い方で学生たちを支援しております。この「300 日」の考え方ですが、授業は大学では年間 30 週行われます。１週間、月曜日から金曜日まで５日間ありますので、30 週×５ということになりますから授業は年間 150 日です。1 年 365 日のうち日曜と祭日を除きますと約 300 日ありますので、授業の 150 日と、残りの 150 日を課外学習の充実にあてることで年間 300 日の学習支援を実践していこう。さらに、その中で学生たちが、１人１人の教育付加価値を高めていこうという考え方に立っております。

それでは、金沢工業大学の特色ＧＰ、現代ＧＰの選定状況をご説明させていただきます。特色ＧＰは平成 15 年度にスタートした文部科学省の事業でございます。幸いにも第１回目に選定をされました。これは総合的な取組という区分形で選定率 11.5%に入りました。平成 16 年度から現代ＧＰという事業が始まりまして、それも幸いに第１回目に選定をされました。残念だったのですが、特色ＧＰは選定されませんでした。そういう意味では金沢工業大学は、特色ＧＰを平成 15 年度と 18 年度に二ついただいております。現代ＧＰは 16 年、17 年、18 年度と順番にいただいております。合計しますと４年連続いただいたという形になっております。

それでは、ここからスライドを見ていただき、具体的な取組事例の紹介を順次させていただきたいと思っています。平成 15 年度の特色ＧＰ、「工学設計教育とその課外活動環境」というテーマでございます。この取組は、平成７年度から実施した本学の教育改革において、全学生の必修科目として本学で独自に開発した工学設計教育です。実は平成 14 年度に文部科学大臣賞という賞を受賞した教育プログラムです。この教育プログラムの特徴は学生がチームを組んで学生自らがチーム活動を進めていく中で、問題発見解決プロセスを学んでいこうということと同時に、お互いの人間力と技術力を磨き合い、さらにチーム活動を通して知識を組み合わせて新たな価値を創造していこうという事を体得する教育プログラムです。この教育を実現するために、先ほどご紹介しました教育支援機構の各支援センターが学生１人１人の課外学習をバックアップしています。スライドのほうは、工学設計各教育のねらい、授業風景、課外学習の写真を入れてございます。

次のスライド、平成 16 年度現代ＧＰですが、この取組は、本学が所在する自治体と共同して、平成 15 年度にインターネット上に生涯学習サイト、「インターネット町民塾」を立ち上げました。地域住民と学生や大学、さらに行政とがパートナーシップを確立しまして、地域全体の学習力と教育力の向上を目指した教育プロジェクトです。この教育プロジェクトの特徴は、本学の学生や教職員、地域住民が積極的に地域社会の文化や特質、ニーズを共に学ぶコミュニティーを形成し、その成果を教材コンテンツとして共同利用していこうとしているところにあります。スライドは、実際に本学の先生が講座を開きましてフィールド調査を行い、学生が「安全・安心マップ」を作り、その教材コンテンツをインターネットで流すという形になっています。

次のスライドは、平成 17 年度の現代ＧＰ、「ネット版工学基礎教育センターへの展開」です。これは入学生の学習歴の多様化ということと、学生１人１人の学習意欲と基礎学力の向上ということを目的としたものです。実は、平成 12 年 4 月に工学基礎教育センターというセンターを立ち上げました。工学の基礎というのは、数学、物理、化学という高等学校の教育です。分かりやすい授業の実践と補助教材の開発、さらに個別指導の充実を組織的にやっていこうということで、現在約１万４千名の学生たちがこのセンターに通っています。この教育プロジェクトは、工学基礎教育センターの持つ機能をネットワーク上に設けて、時間と空間に依存しない学習支援というものを提供していこう、もしくは構築していこうという考え方に立っています。実際に学生の声を聞きますと、土曜日・日曜日も勉強

がしたいという声がたくさん出てきました。どうしようかなと考えた結果、これはやっぱりＩＴを使おうということで、ネットワーク上に「ＫＩＴ数学ナビゲーション」というｅラーニング参考書というものを、700ページのコンテンツとして作り上げました。これは大学のホームページの工学基礎教育センターをクリックしていただくと、その中に入っています。インターネット上にありますから先生方もご自由に使っていただけます。教科毎になっていますから、ぜひ一度ご覧いただければありがたいなと思います。

それと共に、この取組を支援するのは「ネットチューター」という、工学基礎教育センターで活動する学生スタッフです。学生スタッフは、電子メールや電子掲示板を用いて個別指導を学生同士でやろうというふうに考えておりまして、今、学生スタッフの養成というものを実際にトレーニングとしてやっております。また現在行っておりますが、入学前学習支援として作り上げております教材のコンテンツ化とそれの配信ということを考えておりまして、入学予定者も含めて学習意欲というものを高め、さらに基礎学力の向上に資していきたいなというプロジェクトでございます。

次の四つ目のスライドですが、これは今年いただきました現代ＧＰです。テーマは、「発展する地域連携プロジェクトの実践」という教育プロジェクトです。この取組は、金沢市を対象にした「あかり」をテーマにしています。実は、その「あかり」というのは、安全のための照明確保という問題と、金沢市の場合は観光資源となる夜間照明の演出ということを考えております。これを町づくりとしてプロジェクト化したいということで提案させていただいたものです。この取組の特徴が、金沢市の中心市街地活性化基本計画と連動しておりまして、特定の地域を対象とした、「ポイント型」と言っておりますが、「ポイント型地域連携」から複数のプロジェクトが現在町の中で動いておりますが、その複数のプロジェクト活動を都市計画の側面から包括的に連携して実践しようという、「エリア型地域連携」という考え方をしております。

この活動プロセスを通じて学生たちは地域社会のニーズの捉え方、さらに地域行政の計画への参加ということで、問題発見解決ということをそのプロセスとして学んでいこうという教育プロジェクトです。スライドのほうはイベントの写真を貼ってありますし、準備段階の写真を貼りつけてございます。ここに至るまでは、町の方々と一生懸命話し合いをしまして、こういう大きなものを置く時にいろんな認可をいただかなければなりません。県庁に通い、市役所に通い、警察に通い、そういう意味で行政というものがいかに縦割りになっているかということを学んできます。そういう意味で学生さんたちと話をしている時には、「もし公務員になったら、後輩の学生が何か訪ねてきたら君たちはそういうふうにならないで親切に対応してほしいなあ」というふうに言っています。

それでは次の５番目のスライドですが、18年度現代ＧＰ、「ＫＩＴ産学連携教育プロジェクトの実践」です。この取組は、産業界との密接な連携体制の下で、学年、学部、学科の枠組みを超えて本学の教育の特色とする工学設計手法としての問題発見解決プロセスを企業が有する社会的な制約条件を盛り込む教育プロジェクトとして構築して、学生には社会性の強い実践的な学習環境を提供していく教育プロジェクトです。この取組の特徴は、実は学生のインターンシップと結びつけてあります。一つは実際のものづくりを学びながら技術者とはということを学ぶ「技術者シミュレーションモデル」と名づけております。もう一つのモデルは、企業の仕組みを理解しながら技術者を理解するという「学内ベンチャー企業モデル」と名づけていますが、この二つの教育プロジェクトを構築して学生の実践的なスキルの向上と、技術者としてのキャリア像というものを明らかにしていこうという教育でございます。

スライドのほうは、実際の企業の方に本学に来ていただいて、企業の組織プロフィールをご説明いただいて、学生は実際の現場に行ってものを見てくるわけです。インターンシップと結びつけているというのは、事前学習で約６週間の問題発見解決のテーマをいただいて、それでコンペを行い、コンペで勝ち取った人だけがインターンシップに行けるというものです。インターンシップに行った学生たちは、社内で現業体験をし、そのことを実習企業内で発表してきます。企業は新入社員にそれを聞かせて、また社内的にも影響を与えたいということで会社にも役に立つという評価を得ています。大学に帰ってきてからは、このプロジェクトに参加した全学生に対してこれを公開して行き、そのことによって技術者とはこうだった、あの会社はこうだったということを大学の中で情報としてシェアしていこうという教育プロジェクトでございます。

次のスライドは取組事例６の平成18年度特色ＧＰ、

「学ぶ意欲を引き出すための教育実践」ですが、ここは少し具体的にご紹介をさせていただきたいと思っております。仕組みとしては、「ＫＩＴポートフォリオシステムを活用した目標づくり」というサブタイトルをつけさせていただきました。この取組は、実際の授業や課外学習、学生生活での行動履歴というものをＫＩＴポートフォリオシステムに蓄積、管理していくわけですが、その情報をもとに修学アドバイザーの先生方と定期的な面談を通して、学生自らの自己実現目標というものをキャリアデザインとして描き、「学ぶ意欲」を引き出してその向上を組織的に図っていこうという取組でございます。

この学ぶ意欲を引き出す基盤となるのが、スライドにありますように修学基礎教育でありまして、学生と教職員が積極的に関わり合うことで、「学生１人１人の教育付加価値を高めていきたい」と考えております。スライドのほうはコアとなる科目と修学アドバイザーの先生方、さらにポートフォリオというものを使いながら、「気づきの中で意欲の触発と目標づくり」を実現していこうと考えています。

それではここで、ポートフォリオシステムというのは先生方ご存じかと思いますが、ポートフォリオシステムを活用した教育のねらいということについて、若干本学が考えていることをご紹介します。本学では「大学で何を学ぶのかとか」、「大学で何を身に付けるのかとか」、「大学で何ができるようになるのか」ということがとても大事ではないかと考えています。そういう意味で先ほど来お話をしておりますとおり、授業の充実と課外学習の充実をやはりきちっとやっていかないとだめじゃないかなという中で、そういう活動の中から、実は「気づき」というものが生まれ、気づきから意欲を引き出していこう。さらに気づきから「自己変革」をしていこうということで、「自己成長型教育への仕組みづくり」というものを考えています。

この仕組みのコアになりますのが、「達成度評価ポートフォリオシステム」と言っておりまして、後ほどちょっと詳しくご説明したいと思うのですが、自分自身を自己分析し、自分の将来をどうしていこうかということを自分自身で考えていくようなプラットフォームを作りあげていこうという考え方に立っています。そのプラットフォームを学生が作り、先生方がそれを見て、そのことによって大学としては、やはり学生１人１人の自己実現というものを支援していこうという考え方に立っております。

まず全体像をお話したほうがよいかなと思います。次のスライドは、ＫＩＴポートフォリオシステムの全体像でございます。このポートフォリオシステムには修学ポートフォリオ、キャリアポートフォリオ、これは修学基礎や進路ガイド基礎の授業で作り上げていくものとして、科目と連携したポートフォリオです。それと自己評価レポートというのは各授業で提示された行動目標を自己分析し、その中に学習履歴を入れていこうというものと、課外活動に関する自己評価をしていこうというものを自己評価レポートと言っています。

それと、平成 15 年度に選定をされました工学設計教育においては、いろんな成果物を紙媒体で残してきたのですが、これらを電子媒体でこれから残していこうという考え方の中で 18 年度から稼動を計画していているシステムです。学生達は、チーム活動から、自分はチームの中でどのような貢献ができたのかという、自己評価ということを達成度評価と共にやっていこうという考え方をしております。それを実現するものがスライドの真ん中にあります「達成度評価ポートフォリオ」ということで、その達成度評価ポートフォリオの作成を通して、その実現を図っていこうというふうに考えています。

それでは次のスライドで、ＫＩＴポートフォリオシステムのエンジンとなっております修学ポートフォリオの説明をさせていただきたいと思います。実はポートフォリオというのは授業でも活用していますし、修学アドバイザーの先生との面談情報としても活用しているわけです。先ほどコアとなる四つの科目において、それぞれ目標がありまして、スライドでは一番下のほうから「修学基礎」というのは金沢工大生としての自覚と意欲、さらに「人間と自然」というのは社会人になることの自覚と意欲、「技術者入門」というのは技術者になるための自覚と意欲、さらに「進路ガイド基礎」というのは自分のキャリアデザイン等をどう描くのかということの自覚と意欲というものを高めるような授業の目標を掲げて、学生たちがそれに取り組んでいます。そこにいろんな行動履歴が入ると共に、先生方はその行動履歴から、自分たちが実施している教育が果たしてそれでいいのかということについて、授業運営だったり、成績の評価、さらに学生の評価に基づいて、さらに教育の方法を考えていこう。そのことによって、もっと教育の質の向上と教職員による修学指導の充実

を図っていこうということを考えているわけです。

具体的にどのように運営しているかということですが、スライドでは１年間の学期、本学は３学期制で運用していますので、春学期、秋学期、冬学期があり、まず学期を選びますと１カ月のカレンダーが出ます。１カ月のカレンダーでその日を選びますと、１週間の行動履歴を記入するパターンが出てきます。学生はここに行動履歴を書きます。行動履歴が書かれたものを修学アドバイザーの先生は１週間毎にコメント情報を書きフィードバックします。そのことを１週間単位毎に学生にフィードバックをかけます。そのことによって学生たちは次の週、次の週ということで、毎週毎週自分の行動だとか、学習というものを振り返ることをやってきております。

それと１学期毎に面談が２回行われます。１学期が終わればその１学期学習した自分の行動の達成度ということと、自分のその修学状況の反省と改善方法というものをここに記録していくわけです。そのことによって自分はどうだったのかということと、これを次に引き継ぐ先生または修学アドバイザーが学生の状況を分かるわけです。修学アドバイザーは、１年間は変わらないのですが、学年が変わると修学アドバイザーは変わりますので、学生がそれぞれどういう思いで学習したり行動したりしてきたのかということがこれでは分かるようになっています。さらにこれを達成度評価ポートフォリオの中でサマリー化していこうという考え方です。

それではキャリアポートフォリオについて、そのキャリアデザインをする方法をご説明します。まず最初に、高校までの自分史というものを作り上げてもらいます。その次に、卒業後自分はどうなりたいのかという大学卒業後のキャリア像というものを明らかにしてもらいます。さらに、それでは具体的に在学中に何に取り組んでいるのかということを実際に書いてもらいます。そして、自分の特性と目標というのは何なのかということをもう１回自覚してもらおうと思っています。キャリアポートフォリオというのは書き直しができますので、過去の自分と将来こうなりたい自分、さらに現在こんな自分というふうに自らの体験と情報から分析していこうという形で構成しております。

それでは、この取組のコアとなっています達成度評価ポートフォリオについて、もう少し詳しくご説明をさせていただきます。達成度評価ポートフォリオは、学生１人１人の段階的な目標作りと修学満足度の向上を図るために、授業の行動目標に対して学生自らが学習の点検改善と次の目標の明確化を図ること。さらに先生方は、ＦＤ活動の情報として活用することで授業の工夫・改善、さらに修学指導の充実を図っていこうという考えで作ってきております。学生はこのポートフォリオから、自ら取り組んだ行動や成果を振り返って、それをサマリー化していくわけです。サマリー化し、学年毎に回顧、展望を図り、その達成度評価をしていき、その中で自分の成長の軌跡と修学の自覚、さらに自立、反省から技術者になるための意欲というものを高めていこうという仕組みです。

スライドのほうは、修学ポートフォリオ、キャリアポートフォリオ、工学設計ポートフォリオ、自己評価レポートポートフォリオというポートフォリオが個別にあります。これは既存システムとしてもう既に動いております。その個別に動いているものをいじらないで、自分のプラットフォームにそれを持ってこようと考えています。その自分のプラットフォームでは今年度の目標と達成度の自己評価を行い、さらに修学生活の反省及びその改善方法を図り、自分の希望する進路に対してどのように行動したのか、成果はどうだったのか、将来どうするのかということを明らかにし、その中で自分の能力というものを分析して判断していこう。そのことによって次年度の目標をさらに立て、行動計画を立てようという考え方で達成度評価ポートフォリオの作成を動かしています。

これは金沢工業大学の教育ビジョンとして言いました「教育付加価値」という問題がありますが、「教育付加価値は何でしょう」という、これにお答えしていく一つの仕組みであるというふうに考えています。そういう意味では教育付加価値の定量的な、もしくは定性的な評価というものを実現していく一つの手段であり、このことによって学生自身が自覚し、先生方がそれを支援し、さらに大学が説明責任としてそれを実施していこうという考え方の中で、この達成度評価ポートフォリオシステムというものを運用していきたいと考えております。

最後になりますが、「ＧＰを通した大学教育改革の意義」ということでまとめをさせていただきます。やはりＧＰというのは、大学の教育の質を発展向上させるための教育改革プログラムというふうに考えています。このＧＰ事業は、唯一大学自らの努力で競争的環境で、

第三者評価と財政的な支援を受けることができる文部科学省の教育改革支援事業です。そういう意味では、本学において、このＧＰに積極的にチャレンジしてきましたし、選定されなかった年もあるわけですが、いくつかの成果が出てきたと考えています。大きく分けると、四つぐらいの成果と特徴が述べられるかなということでご紹介したいと思います。

一つは、やはり学内の教育改革が加速したというふうに考えています。この教育改革が加速したというのは何で証明されるのかということになりますが、これは二つ目の特徴として、学生が元気になって意欲的に活動するようになったということです。さらに、この意欲的に活動するようになったというのは何で証明するのかということになりますが、この成果というものが実は３番目の特徴なのです。学生達が活躍して、またその成果が、いろんなマスメディアで取り上げられて大学ランキングで評価されるようになりました。そういう意味では、さまざまな取組の評価を受けるようになったわけです。そのこと自体が教育改革を加速していると考えています。そのことによって４番目の特徴として、これは学内的な問題なんですが、教員と職員、さらに学部と学科の垣根というものがやはり低くなったように考えています。そういう意味では、これまで以上に学内のコミュニケーションが活性化し、これらの教育プログラムを動かしてくると、いろんな意味で活動の輪が広がってきたなという成果があるのではないかなと考えております。このことによって、本学はさらなる特色が図られてきたかなというふうに思いますし、このような特徴は実は本学だけではなくて、他大学でも同じように行われているのではないかというふうに考えています。

各大学でもこのＧＰ事業というものに積極的に実はチャレンジされていまして、このフォーラムでいろいろな意味でプレゼンをさせていただいております。そういう意味ではここにお集まりの皆さまにはこのＧＰ事業の良き理解者として、また先生方には、できれば進路指導での活用していただける情報として、また大学の評価の「新しいモノサシ」になればいいなということを本音で考えています。やはりそう考えますと、先ほど真境名さまより厳しいお話もありましたが、大学は今社会に開かれた教育機関として、教育と研究の実践が求められているというふうに考えています。ますます教育の質の向上に向けた真剣な取組というものが求められており、その必要性を十分に認識しています。

金沢工業大学の姿勢、考え方ですが、「教育は使命であると考えておりますし、研究は義務」ということです。また大学においては研究なくして教育なしというふうに考えております。そういう環境の中で、教育改革を積極的に推進していきたいと考えております。

それでは私の発表をこれで終わらせていただきます。どうもご清聴、ありがとうございました。（拍手）

○司会：村井さん、ありがとうございました。

それでは、最後に全国の高等学校の先生方から日頃各種のお問い合わせとかご依頼に対応なさっております、株式会社ベネッセコーポレーション、高校事業部情報本部統括責任者の木野内俊典さんから『大学全入時代の進学指導はどう変わるか』というテーマで、偏差値以外の大学選択情報として、大学内のどのような変化に着目すべきかというような観点からその重要な指標として、例えばＧＰなどを用いながらということでご講演いただければと思っております。それでは、よろしくお願いします。

○木野内：先生方、失礼いたします。いつも大変お世話になっております。私、ベネッセコーポレーションの木野内と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

私のほうでは、『大学全入時代の進学指導はどう変わるのか』というテーマでお話をさせていただきたいと思います。先ほど文部科学省の荒木さんのほうから、私の今担当部門のご紹介もありましたけれども、私がベネッセの中で所属している部署は、主には高等学校の先生方を通して進研模試ですとか、スタディ・サポートといったようなアセスメントをご提供させていただいているという部署でございます。その中でそうした形で学校担当者が日々全国の高等学校にお邪魔をする中で、その学校担当者を通して、あるいは私どもへ直接さまざまな情報に関するご依頼を先生方からいただいております。ここでは「年間６千件以上」というふうに書いております。毎年６千件を超える問い合わせを全国の高等学校の先生方からいただいているというところでございますが、そのお問い合わせの内容をここにいくつか例で挙げております。

四つほど挙げておりますけれども、例えば、知名度はないが取組が評価されている大学を知りたいというようなご依頼。あるいは、大学の看板学部や研究内容

を一覧で見ることができる資料がほしい。または、ＣＯＥの文系版の大学とその取組内容を知りたいと。あるいは、英語コミュニケーション能力の育成に力を入れている大学を知りたいと。

ここで見られるご依頼の例ですね、いくつかピックアップをしましたけれども、キーワードが入っているというふうに思います。例えば、「知名度はないけど取組が評価されている」ということですとか、あるいは「看板学部」とか、その「研究内容を一覧で見れないか」とか、または具体的に「英語コミュニケーション能力の育成」というように、かなりその大学そのものの中身の取組についてお問い合わせをいただいているというような内容でございます。

こうした内容は見ていきますと、まさに今日のテーマでありますＧＰ、「Good Practice」に該当する大学が実に多いということになってまいります。先ほど見ていただいたような学校からのご依頼に関しては、このＧＰの内容をこちらから回答しているということが非常に多くございます。しかしながら先生方からご質問をいただく時点では、先生方の頭の中にはＧＰというものと、その先生方が依頼されている内容というのがつながっていないという状況がございます。こうしたことから分かるのは、高校現場ではＧＰの認知とか浸透といったものが進んでいないのではないかなということでございます。これを裏づけるデータが次、このスライドにも出しておりますが、高校の先生方における大学・短大の重視度と把握度のギャップということでグラフを出しております。

全国２千校弱の進路指導のご担当の先生から回答をいただきました。全国で２千校弱になりますので、実質殆んどの進学校の先生方からご回答をいただけたというものになります。それぞれ質問項目をカテゴライズをして、重視度と把握度のギャップを見てみました。つまり、こういう情報は非常に重視をしているというスコアと、非常によく把握できているというスコアとを比べてみたものでございます。これで見ますと、右側にございます青で示しているいわゆる入試の入口情報の分、こちらについては非常に重視もしていると。高校現場では非常に重視もしている一方できちんと把握もできているということで、重視度と把握度というのが殆んど100に近いところにスコアがあるというのがお分かりいただけるかと思います。

これはやはり入試につきましては、例えばどういった入試科目が課せられるのかといったものは、私どものような業者が一覧にして学校にお届けをしております。また入試問題につきましては、ずばり教科のものも非常に多くございますので、教科の先生がご覧になられると、こういうレベルでこういう単元の問題が出ているというものをすぐに把握していただけるということになります。それに対して大学の中身、あるいは出口に関する情報につきましては、重視はしているものの、なかなか把握ができていないということがこのスコアから見ていただけるかと思います。特に出口の部分については非常に低い状況になっているということでございます。

この大学を入口と中身と出口というふうに時間軸で分けた場合、高校生が入試を受けて受験をしていくこの入口情報については、非常に高いレベルで重視度も把握度も維持をされていると。しかしながら、一旦その子供たちが中に入って学ぶ内容といった中身、そして就職あるいはさらに上位の大学院等への進学に関わる出口の部分については、先生方は相対的に把握度が低いという状況でございます。こうしたその状況を踏まえる中で、現在はその入口情報が非常に高校現場にて重視度も高いのですけれども、これから大学の全入時代を迎えていくと今後は今以上に中身や出口の情報が重視をされてくるだろうというふうに思われます。

では、全入時代というのはいつ到来するのかというのがこちらのスライドでございます。こちらは 2004 年から８年度の入試までの５カ年のスコアを取っておりますけれども、こちら、上のほうにある白抜きの点で示してあるところが入学者数という実数です。対して黒四角で塗ってあるところが入学定員ということで見ていきますと、この 2007 年度、つまり現在の高３生の入試の時までは、いわゆる入学定員よりは入学者数のほうが上回ると。これは多くの大学等で入学定員を上回る入学者数が存在することからなんですけれども、いよいよ 2008 年度入試になると、大学の入学定員と比べて入学者数が割り込むという時代に入ってくるのではないかなというのを私どもの推定も含めて予想をしております。

こうした状況が全国で見るとございますけれども、個別に見ていきますと、もう既に全入は始まっているというふうに申し上げてよろしいかと思います。それぞれ国公立、私立、短大を実質倍率毎に円グラフでその占有率を集計したものでございます。これは私ども

で調べたものですけれども、国公立大学の場合はこちら、白抜きのところが倍率が２倍以上ということですので、３／４以上は競争原理が働いているというふうに申し上げてよろしいかと思うのですけれども、私立大学になりますと実質倍率が１倍以下というのが16.9%、そしてあと非公表というのがあります。これが我々からすると非常に厄介な公表スタイルでございまして、公表しているけど非公表だということで、実際は倍率が１倍を割っている可能性があるのではないかなというふうに見ております。となると実質倍率１倍以下と非公表を含めると、私立大学の場合は34.9%。１／３以上が既に全入になっているのではないかというふうに見えます。また短大におきましては１倍台以下が31.1%、そして非公表が36.4%というふうに見ますと、合わせて67.5%、実に２／３以上がやはり全入に近い状態になっているのではないかなというふうに申し上げてよろしいのではないかなと思います。

こうした中で、高校生の進路意識の変遷も合わせてご紹介しておきたいと思います。こちらは私どもで調査をした内容ですけれども、1980年、1992年、2003年ということで、大体干支が一回りするかしないかぐらいのペースで調査をしているものなんですけれども。上がっているところは赤で、そしてほぼ同じぐらいのスコアの場合は横で、下がっている場合は青でというふうにお示しをしておりますけれども、やはり自分自身への志望学部や学科へのこだわりというものは非常に高いですし、またそれが維持をされているなということが分かります。これが入試の部分の全入が進行していけば、さらに中身への関心が高まっていくのではないかなというふうに思われるところでございます。

こうした状況をまとめてみますと、まずは高校の先生方や高校生にとっては、このＧＰという認知は正直あまり高くないなというふうに私も感じています。これは私自身も高等学校にお邪魔をする機会が非常に多くございますし、同様に大学の方からお話を聞く機会も多々ございます。その時に、これはＧＰもそうですし他でもそうなんですけれども、大学としてはこれはすごくＰＲポイントだというふうに思われていることが、高校現場とか高校生には必ずしも同じ温度では伝わっていないということが非常に多くあります。そこにギャップが生じているということです。

しかしながら生徒の進学先の選択は、入口の難易度から中身への関心度がこれからは高まっていくでしょうというところを加味しますと、大学は高校現場に対してＧＰの内容紹介をさらに強化、充実させていく必要があるということですし、それが高校生にとってもさらに納得感のある高い進路選択につながっていくのではないかなというふうに思います。従いまして、今日は高等学校の先生がこの場にたくさんいらっしゃいますので申し上げるとしたら、よく大学の方が高校にいらっしゃると思います。その時に、ぜひ中身の取組を意識的に聞いていただければなというふうに思います。そしてその内容を生徒たちにお伝えをいただくと。逆に大学側も、この高校の問いかけに答えられないと先生からは薦めてもらえないということは肝に銘じるべきだろうなというふうに思います。大学側も、高等学校及び高校生に対して、そうした取組、中身の情報については分かりやすく且つ積極的に発信をしていただきたいなというふうに思います。

ではちょうど時間になりましたので、以上をもちまして私からの発表は終わらせていただきます。どうもご清聴ありがとうございました。（拍手）

○司会：木野内さん、ありがとうございました。大学教育にさまざまな角度から日頃から接していらっしゃいます御三方から、ご講演いただきました。皆さま方、いかがでしたでしょうか。私にとっても新鮮な情報がございました。明日からの糧にしたいなというふうに思っております。

時間のほう10分弱程度しかございませんけれども、せっかくの機会ですので、ここから質疑応答に入りたいと思います。幅広い観点からご質問いただければと思っております。質問でなくてもご要望等でも結構かと思っておりますので、せっかくの機会ですのでお手を上げていただければ係の者がマイクを持って参ります。どなたかございましたら、挙手のほう、よろしくお願いいたします。

ございませんか。なかなか最初は口火が切りにくいというのもあるかと思うので、それでは司会の方からで恐縮ですが、いくつかお話をお伺いできればと思うのですけれども。例えば大学の立場ということで村井さんのほうからご意見いただきたいのですけれども、今日もご講演いただきましたが、大学の現場側としてぜひ高等学校の先生方とか、進路について考えている、大学に行きたいなと思っていらっしゃる生徒さんにこういうところを見てほしいというようなものがあれば、繰り返しになる部分もあるかと思うのですけれども、

できるだけ身近な例なんかも踏まえてご紹介いただければと思っているのですけれども。何かございますでしょうか。
○村井：金沢工業大学の場合は全国の高等学校に訪問させていただいて、いろいろと情報交換をさせていただいているのですが、今日のお話を伺っていまして、ちゃんとした内容をお伝えしているのかということについて、大学としてもう一度確認をしたいなというふうに実は思っています。その身近な情報という形では、いろいろとホームページだとかパンフレットだとかということに載せているつもりなんですが、大学の言葉でしか語っていなくて、できればそのご要望というものを積極的にお聞きできるような体制にもっていきたいなというふうに思っています。
○司会：ありがとうございます。我々文部科学省側にも、いろいろご批判も含めてご意見いただいたのですけれども、真境名さんのほうから、例えばＧＰの特徴として情報発信というのが一つあり、そこは今日の一つの論点というふうにしていただいていると思うのですけれども、何かご意見や提案がございましたら教えていただければというふうに思うのですけれど。
○真境名：「うちはＧＰの広報はしていません」という大学は恐らくないと思います。ただ、誰を対象にするかというところで、やはり高校生、高校の先生たちに伝えることにも、もっと力を入れるべきじゃないかと考えています。申請書をそのまま広報に使うという例を先ほど出しましたけれども、私のような仕事をしている者でも、ああいう表現で説明されると、正直に申し上げてよく分からないのです。文部科学省に説明する文章と高校生に説明する文章とでは、当然違うはずです。高校生に対する広報では、冒頭で一言、ポイントを言うのが効果的ではないでしょうか。先ほど紹介した千歳科学技術大学を例にとると、「理系の学部で勉強するために必要な物理と数学は、高校レベルの復習をｅラーニングも使ってしっかりやります。それによって大学での勉強がどんどん面白くなります。そこが、本学の教育の特色です」ということから入って、具体的にどんなシステムなのか説明する、というような広報が考えられます。
それから、実際にその教育プログラムを高校生が体験できるイベント的な広報も提案したいと思います。北海道大学は、リベラルアーツ重視で、北海道というフィールドを存分に生かしたユニークな教養教育で特色ＧＰに選定されています。それをオープン・キャンパスでコンパクトな形で体験させています。言葉による説明だけではなく、何らかの形で授業そのものに触れる機会があれば、一番分かりやすく伝わるのではないでしょうか。同様の試みがどんどん広がっていけばいいと思います。
○司会：ありがとうございます。真境名さんからのご意見に関して少し文部科学省の宣伝になってしまう部分もあるのですが、我々の行っている情報発信活動をご紹介したいと思います。まずは、本日も含め規模の大小はありますが年数回この様なフォーラムを開催しています。また、皆さま方のお手元のパンフレットの225ページに紹介していますがメールマガジンも発行しています。ちなみにこれは文部科学省として初めて一般配信を始めたメールマガジンです。このメールマガジンは高等学校の先生方のご登録も数百人ございます。我々スタッフが各大学の取組を拝見させていただいた体験談なども載せておりますので、興味があれば是非ご登録いただければと思います。また、特色ＧＰのほうでは、毎年選ばれた取組について事例集を出しております。こちらは全国の全ての高等学校に一部ずつお送りさせていただいておりますが、見ていただいた先生もいらっしゃるのではないでしょうか。もしまだの先生がいらっしゃれば本日ポスターセッション会場の大学基準協会ブースに行っていただければ、いくらかお渡しできますのでお持ち帰りいただければと思っております。
　特色ＧＰは村井さんのほうからの説明からあったように実績ベースですので、紙媒体の事例集というものをまとめております。一方、現代ＧＰというのは計画ものですので、冊子という形ではなくて今のところ、いわゆるインターネット上で、取組の進捗状況を情報発信してくださいということをお願いして、そのリンク集を文部科学省のほうで持つという形をとっていますので、ご興味あれば見ていただければというふうに思っております。
　残り時間が僅かですけれども、木野内さんにも一つお聞きしたいのですが。高等学校の先生方からいろいろお問い合わせを受けていらっしゃるということなんですけれども、実は10月の末、札幌で特色ＧＰの単独フォーラムを開催したのですが、附属校をお持ちの大学が事例報告をなさったんですけれども、そこで実はうちの附属校の先生ですらＧＰを知らないと。認知

度を上げるには何かないのかと、文部科学省や大学基準協会に何かやってほしいというようなご意見もいただいているところですが、木野内さんのほうから見て、今伝わっていないのが現状だと仮定したとしてどこに原因があって、こういう手段であれば高等学校の先生方は情報を見るんだということがあれば我々が伺いたいということで恐縮なんですけれど教えていただければと思います。

○木野内：はい。まずＧＰも、あと他の教育プログラム等も含めて、なかなか大学さんとかあるいは文部科学省の皆さんが考えるほど高校現場に伝わっていないというようなことは申し上げましたが、例えば今紹介のあった事例集も非常に分厚い冊子です。高等学校の先生方は非常に多忙でして、特に学校５日制になってからは本当に多忙をきわめているという状況があると思います。その中で情報収集を一つ一つ膨大な資料の中からしていくというのは、現実的にもう不可能じゃないかなというふうに外部から見ていて非常に感じているところです。そうした時に、先ほどのメールマガジンというのも一つの手段だろうとは思うのですけれども、ある程度切り口を明確にしたプッシュ型の宣伝スタイルというものが必要になってきているんじゃないかなと思います。

あと分かりやすさがやっぱり非常に必要だろうなというふうに思っていまして、今高等学校をお邪魔しますと、評価される大学さんは「面倒見がいい」というキーワードをよく聞きます。とにかくよく面倒を見てくれる、学生に対して親身に対応してくれているということが伝わっていくと非常にその大学の評価というのは高まっているというふうに思います。なので、これは大学側の施策としては、例えば卒業生等を使ってその高校現場に自分自身が大学で受けている教育というものをＯＢとして発信をしに行くというのも一つのやり方だろうと思いますけれども、文部科学省がやられるとしたら先ほど申しましたメールマガジンも一つですし、あとは切り口を明確にしながら端的なご紹介をしていくということが一つその内容が伝わっていくものだろうというふうに思います。全部網羅的に伝えようとされるとボリュームが非常に大きくなると思いますので、先生方に伝わりやすいような形でまずは１本きちんと伝えていくと。そこからは、あと先生方のほうでご自身で広げられていく可能性があるのではないかなというふうに思います。以上です。

○司会：ありがとうございます。そろそろお時間ですけれどもせっかくの機会ですので、ぜひ高等学校の先生ですとか、あと教育委員会の方でも結構ですけれども、直に高校というところの現場に接していらっしゃる方からご提案でもご批判でもご意見でも構わないので、何かいただければというふうに思いますが、ございませんか。

○秋草：埼玉県にあります秋草学園高等学校から参りました秋草と申しますが、高校の側にいて思うのは、まず大学の方さえも現代ＧＰと特色ＧＰをはっきり答えられないというのが現状ではないかと思います。ですから大学の方が広報で高校に来て、現代ＧＰと特色ＧＰについて教えてと言っても明確に答えられないというのが現状。そしてなおかつホームページで見ていても、まず分かるようなホームページではないというのがあるのが一つ。それと金沢工業大学さんはかなりいろいろな取組をやっておられますけれども。選定取組の中には大学全体がやっているような感じで見せていますけれども、実際は教授が研究の一つとしてやっているということさえも伝わっていない。つまり大学が全てがやっているような感じで伝えることもあったりして、しっかりと情報が伝わってこないと思います。この辺がかなり問題点じゃないのかと感じています。以上です。

○司会：その点については、そのようなことがあれば我々のほうでも改善していきたいと思いますけれども、木野内さんもそういうふうにお感じですか？

○木野内：やはり「ＧＰ」というフレーズは高校現場にも伝わっていますので、今秋草先生がおっしゃったように、来られた時にお聞きになられた先生も多数いらっしゃいますが、広報の方がきっちりと内容をご存じない。あるいは回答が不明確であるというようなケースは私も伺っております。しっかりとそのフレーズを持って自分のところはどういうことをやっているというのをまずきちっと言い切れるように大学の方もしっかり見ていただきたいなと思いますし、あとやはり全学でやっているのか、それか個別の取組なのかというのが非常に重要なポイントで、そうなるといわゆる志望する大学の中でもやっているその学科を選んでいく、あるいはそうじゃないところは志望を控えるというようなことも十分あり得ますので、どの学科でやっているのか、どの募集単位でやっているのかといったようなところも明確に大学には説明をしてほしいなと

いうふうに思います。
〇司会：加えて申し上げておくと、特色ＧＰ・現代ＧＰへの申請は組織的な取組ということになっているので、基本的にお一人の先生方だけが行っているというものでは申請や選定というのはなされないという仕組みになっています。また、申請に当たっては大学は学部以上、短期大学であれば学科以上ということになっています。秋草先生がおっしゃったように必ずしも全学的な取組ばかりではないのは事実ですので、その点は我々もこれまで以上に注意して情報発信していきたいと思います。
　それでは時間となりましたので、『大学教育改革プログラム合同フォーラム「高等学校関係者向けの分科会」』を終了させていただきたいと思います。それでは最後に再度本日ご講演いただいた御三方に大きな拍手をいただければと思います。どうもありがとうございました。（拍手）

（了）